
青の祓魔師 ~ 青き焰 ~

翔楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青の被魔師 ～青き焰～

【Nコード】

N4423X

【作者名】

翔楼

【あらすじ】

16年前の悲劇「青い夜」

この事件によって主人公の人生が変わってしまった（まだ生まれてなかったけどさ（笑））

パラディン

最強の聖騎士に育てられた3人、高校生活が始まろうとしている春に物語は始まる…

*薄桜鬼の連載とは違って、ほぼ原作沿いです

でも多少ギャグになる(↑)

オリキャラ紹介

名前 さくらばやし かえで
桜林 楓

性別 女

年齢 15歳

肩書 正十字学園 高等部1年生
抜魔塾 ベイジ 訓練生

生年月日 7月3日

血液型 O型

体重 ???kg

趣味・特技 二度寝 音楽鑑賞 歌をつくる 料理 読書 早起き

一日平均睡眠時間 平均8時間

好きなマンガのジャンル バトル・アクション ギャグ コメディ SF

好きな異性のタイプ 優しくて、頼りになる人（めっちゃ普通）

好きな言葉 成せば成る 信念を貫く 誠

好きな休日の過ごし方 昼前まで寝る お菓子作り ひたすら
読書 音楽鑑賞 作詞

好きな食べ物 甘いもの（特に和菓子）

オリキャラ紹介（後書き）

～あとがき～

どうも、はじめましての方もお久しぶりの方もいると思います！
！翔楼です

ハマったノリで書いてしまいました（え）

実は私、連載をこれで2つ目なんですよ…

正直ちゃんと両立できるか不安なんですが頑張りたいと思います

ちなみに私の小説のオリキャラさんたち、名字も名前も季語見たいな感じなんです！

今回のオリキャラさんの「桜林」はもちろん春、「楓」は秋だし別の小説の主人公は「桜木」またまた春、「時雨」これまた秋分かってくれた人っているのかな…

今回はこのへんでおさらばしたいと思います！
また次回でお会いしましょう！

ちょこつとネタばれ← 見たくない人はスルーしてください！！

・京都組と知り合い！？
・使い魔が4匹いる（本編で出てきたオリキャラ紹介の続きの部分に書きたいと思います）

夢

「なあ、ホンマにとうきょういくん？」

立派な旅館の前に大きな荷物を抱えた女の子とその女の子を取り囲む男の子が三人

これを見た瞬間…ああ、懐かしいなあって思った
今から8年くらい前の事だからなあとも思った

この日は神父^{とう}さんに引き取られた日だ

当時私は亡くなった両親の共通の親友が経営している京都の旅館
‘虎屋’でお世話になっていた

生まれてすぐに自分を生んだ母親は死んでしまったし、父親は私の存在を知らずに死んでしまっていたらしい

だから虎屋のおかみさん夫婦をずっと両親だと思っていたし、その息子さんとも姉弟だと思っていた

事実を知ったのはちょうどこの夢の一週間前、神父^{とう}さんが現れた時に分かった

神父^{とう}さんはあらわれたと思ったらいきなり「この子は俺が引き取る」と言ったのだ

とりあえず、と夫婦が話したが最終的には本人、つまり自分の意見を尊重することになったらしい

どういうわけか私は神父^{とう}さんについていくと言った

8年も前の事だから当時の気持ちは忘れてしまったが、今想像するとたぶんいきなり現れたこの人が自分を变えてくれると思ったのかもしれない

なんせ6・7歳だ、いわばプリキ。ア世代、私としては仮面ヲ。

ダーの方が好みだったのだが

そんな好奇心旺盛な私は一つ大事なことを忘れていた

それは、今まで6年間生まれ育った京都を離れるという事

仲良しな友達や、今まで家族だと思っていた人たちとも離れることになる

神父^{とつ}さんは一週間後に迎えに来ると告げてきたときと同様パツと居なくなった

（どうせ走って行ったのだろうが、何せ6・7歳だ、プリキ。アみたいに消えたんだ！って覚えているのだろう。子どもって恐ろしいわ）

そしてついに別れの日、虎屋のおかみさんの計らいで当日まで息子さんとその友達2人二告げていなかったことを自分で話す

そしたら当然泣くわ喚くわうるさくなった

まあ、私もつられて泣いたけど…

そんなこんなで最初の「ホンマに行くんか？」的なことになったわけだ

その後も3人に服をつかまれ「行かんとつて！」と必死に言われたがついに別れの時

おっ、夢に追い付いた！

「ほ、ほん、まにゝいゝぐんゝが？」（↑これ、泣いてるんですよ？文才なくてごめんなさい<^>）

『うん！！』

「ほんま、に??」

『うん…!!』

「いややあ！！！！かえでちゃんいゝがんゝどつでやあー！！！！」

『ぜ、ぜったいまたあお！！ぜったい!!』

「「「お、おん！！」「」「」

ガシツとしがみついて来ていた三人の手を払いのけ、神父^{とう}さんの方に走っていく

神父^{とう}さんは涙と鼻水でぐしょぐしょになった私の顔を拭きとりながら言った

「新しい家にも俺の息子が2人いるから、なかよくしてやってくれ」

『うん!』

心配掛けないように元気に返事して、抱っこしてもらいながらずっと3人に向かって手を振った

「これからは俺が神父^{とう}さ「んなことは分かってんだよ!!!!!!」
!!!」

『んあ? 燐……?』

どうやらその息子さんは私に昔の事を思い出させてくれないらしいです

(今めっちゃいい話だったのに!!!!!! 燐のバカ!)

夢（後書き）

～あとがき～

どうもこんにちは、翔楼です
今回どうでしたか???いつもより少し長いんですけど...
その前に読者様にこの文、解読できるかが心配です
マジでこれ、語りが多くないですか??
自分、こういうの苦手です...

まあ、いいわけはここまでにして
勘のいい人はわかったかもしれないませんが、主人公のいわば幼なじみ
あの三人です!!京都です!!
.....分かってくれたかなあ...

では、また次回お会いしましょう!

H・23・10・10

青焰魔

…おはよーございまーす

先ほど燐のうるさい声で目覚めました桜林さくらばやし楓かえででーす

なんか眠たそうって??

そんなことないですよー?

ここ最近暇なときにぐっすり寝てましたから燐のうるっさい声でおきたことなんか全然気にしてません
↑

『…おきるか』

春なのに寒いじゃん、なんでだよ!

とぶつぶつ呟きながら布団の中でもぞもぞと着替えて下に行く

『おはよーさん』

「おはよう、楓さん」

「おっ、おはよう!」

私をさん付けで呼ぶのが雪男で、ふつーに返事を返した方が燐
リビングにはその二人しかいなかった

『あれ? 神父しやうさんは?』

「お客さんだって」

あ、兄さん! 消毒するからここ座って!」

『何? またケンカ??』

「ギクッ」

あらか様にビクッとなる燐

…昔っからウソ付くの苦手だよね、そこが良いところでもあるんだけど

「チツ、クソジジイめ…」

「まあまあ」

さっきのケンカをまだ根に持っているのかボソツと悪口を言う燐に、テキパキと傷口を消毒する雪男

私はそれを見ながら机にもたれかかる

「…雪男と楓さあ、いつ高校始まんのか？」

『そういえば、もうすぐだなあ』

「だね」

「…はー」正十字学園って超名門なんだろう？

家族として俺は鼻が高いね！」

「はは…」

そう、私と雪男は名門の正十字学園に入学するのだ！

と言っても、ほとんど雪男に教えてもらってギリギリ奨学金なんだけど…

「僕は医者になりたいから……ただそのために必死なんだ」

「お前ならぜってーなれるよ！」

『うんうん』

「…がんばるよ」

『手当の手際もいいしね』

「それは兄さんがしょっちゅうケンカするからだね」

きっぱりと言いつける雪男に「ごめんとでも言いたそうな顔をする燐しかし、思い出したかのように会話を再開させる（ぜったい雪男

の視線に耐えられなくなつたから)

「楓は何になりたいんだ？」

『私?? 私は…うーん…』

しいて言うなら神父さんとうみたいに人を助けられるような人になりたい、かな？

ファザコンみたいだけど』

もちろん被魔師になるって意味だけど、燐には分かんないと思う
雪男は若干分かつてそんな顔してるし…

そう言えば、燐と雪男って…兄と弟反対じゃない？

「いや、ジジイみたいにならなくていい!」

『? 何で?』

「楓さんはもう人を助けられる人になってるってことでしょ? 兄さん」

「そういう事だ!」

青焰魔（後書き）

～あとがき～

どうも！翔楼です

更新がかなり遅れてしまい、ごめんなさい！！

さて、今回は楓ちゃんをゲストとしてお迎えしましたー！

（楓）あ、どうもー

さっそく質問でーす

両親の形見とか持ってますかー？

（楓）一応、お母さんのロザリオです

えーっと、こんな感じのコーナーをつくっていいこうと思っています！
では、今回のゲストは楓ちゃんでしたー

（楓）さようならー！

あ、翔楼に文句がある人は感想をどうぞ

時雨っちと同類、だど…！

……また次回お会いしましょう！

H
2
3
・
1
0
・
1
8

青焰魔？

『うれしいこと言ってくれるじゃん！！！』

そう言ってガシッと二人に抱き付く、こういうスキンシップになれていないのか真っ赤になっている

「ちょ、楓っ！？」

「楓さん！」

『ごめんごめん』

二人とも赤くなちゃって、かわいいなあ』

「っ！……雪男と楓に引き換え、俺はシヨボすぎんな……」

あらか様にため息をする燐
取り合えず二人を離す

「兄さんはどうしたいの？」

「な、なんだよお前も説教か？」

『心配してるんでしょ……』

「神父さんだって兄さんが心配なんだよ」

ま、年中反抗期みたいな燐には分かんないかもしれないけど、口うるさく言うのは心配してる証じゃん

「俺だつてこれでもアセツてんだ、早くまともになんないやっつてもきつかけがないっつーか……」

「じゃあ試しに料亭の面接受けてみたら？」

「え……」

『料亭っ！！？』

料亭って…料亭だよ
ね就活…？

「重く考えないでさ」

『料亭ってどういう事？？』

「お、いたいた

ほれ、面接行くんだろ？」

そう言っ
て投げられる箱

つか料亭に面接…？

料理上手な隣に
びったりじゃん！

「は！？」

「スーツだよスーツ！

礼服だけどりクルート
なんだからビシッと決
めなきゃな」

「まだ行くとか言っ
てないんだけど」

よし、ここは私が一
肌脱ぐか！！

『もし仕事決まっ
たら私特製スキヤキに
しちゃいます！』

「楓特製スキヤキ！
？行く！半年ぶり！」

『「（肉がきっ
かけ…）」』

雪男と楓の思考が同
じなのに本人たちは
知らないだろう…

隣が
渋々面接に行っ
て少ししてから

何故か神父さんが燐を追うように家を出るところを見かけた

『神父さん？』

「楓っ！おまえも来い！！」

いつもと雰囲気が違う神父さんに少しびっくりしながらも付いていく

しばらく歩いて行くとビルとビルの間に悪魔に取り付かれている男と、燐がいた

『っ！！！？』

「…その心には悪がある

主よ、その行いによってその悪行によって報い、その手の行為によって支払い、彼らに報復したまえ」

「ジ…」

「キッ、キサマ…！？」

燐がこちらを向き、悪魔に取り付かれている男が神父さんの言葉に驚く

そりゃそうだ、聖書を唱えているからな…

自分の種族の致死節を唱えられると死んでしまっからなあ…（あくまで傍観者）

青焰魔？（後書き）

ゝあとがきゝ

どうも！翔楼です
さてさて、今回は雪男君です！

（雪男）どうも、奥村雪男です
ところで翔楼さん、早く更新してくれませんか？
僕の登場が1話ぐらいない話が出てくるでしょう！

えー、だつてさー
お勉強が……
…ウソデスッテバーダイジヨウブデスヨー
……ガンバリマス

（雪男）片言ですけど？（黒微笑）
えーっと、雪男君がいろいろヤバいんで今回はこれで！！

（雪男）翔楼さん？
…分かりました、僕が勉強を教えます……少々スパルタですけど

え？（聞いてない人）

じゃあ、さようなら――！……え、ちょ……ギャーーーー！！！！

（雪男）では、また 次回で お会いしましょう

H 2 3 ・ 1 0 ・ 2 0

青焰魔？

「彼らを打ち滅ぼし二度と立ち上がらせたまうな」

「エ、祓魔師かアああ！！！！」

「主は祝されよ！」

「その口引きちぎるぞクソ神父がアあ あッ」

神父とつさんに近づこうとする悪魔に取り付かれている男

神父とつさんは男の攻撃をかわしながら言葉を続ける

「…汝、途に滅びん！！」

言葉とともに左手で空中に十字を切ると、男は断末魔のような声を上げて倒れた

「…落ち着いたか」

「……」

神父とつさんの言葉に状況が理解できていない憐

そりやそうだ、いきなり悪魔が見えたんだからな…（↑あくまで

予想）

私も初めて悪魔を見たときは…

可愛いやつだったからあんまり怖くなかったかな？（図太い）

「お前らの炎はもう…」

降魔剣や鬼神丸では抑えきれないんだな」

え…？

私のちから…？

「燐は自分の炎を見ただろ？
楓、鏡で自分の顔見てみる」

言われた通りに鏡で顔を見る

…え？

漆黒の色だった目は右目だけが青く染まっていた

『これ…』

「青焰魔^{サタン}の炎だ」

マジかよ…

「…？

そ…そいつ大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、俺が悪魔を抜った…憑かれたばかりだったようだ
ただ悪魔は自分と似たものに憑依する、この坊主が変わらなければ
また憑かれるかもな

お前ももう見えるんだろ？悪魔が」

「えっ、これ悪魔！？」

「そうだ…このれ回には二つの次元が合わせ鏡のように存在して
いる

一つは俺たちの住む ^{アッシャー}物質界 もう一つは悪魔のすむ ^{ゲヘナ}虚無界

本来はたがいに行き来はおろか干渉すらできない」

小さいころに寝物語のように聞かされた話…

懐かしいなあー

燐は……理解が難しそうだけど

「だが悪魔はこちらの世界のあらゆる物質に憑依して干渉してくる
例えばコイツは菌類に憑依するコールタールだ、暗闇と湿気と根
暗な人間に群がる」

そう言つてコールタールを指さす
地味に可愛いよね

「まあいい、いずれわかる
立て、今でお前らの覚醒は知れ渡つた」

「…」

『なんで？私は目だけが…』

「お前の覚醒は燐の覚醒につながるんだ」

どちらかが覚醒すれば自動的にもう一人が覚醒するような仕組み
になっている

そう説明する神父さん

「あらゆるものがあらゆる目的でお前らを狙うだろう、その前に
隠れなければ…！」

私と燐の腕をつかんで急いで家の方に向かう

「？ま、まてよ！！隠れる…覚醒つて何だよ！

つてか俺は…俺は何なんだ…！？」

「お前は…悪魔の子供だ」

『！』

「悪魔が人に生ませた…しかもただの悪魔じゃない
青焰魔の落胤だ」

青焰魔？（後書き）

くあとがきく

…雪男が出なかった…
こ、殺されるうー！！

（燐）何騒いでんだ？？

やあ…燐君

今君の弟君について…

（雪男）やあ、翔楼さん
僕、出なかったねえ？（黒微笑）

（燐）雪男…？

（雪男）兄さん…
……次回僕が 本編で 登場したときに罰を受けてもらいますか
らね？

は、はい…

（雪男）では

兄さん！何か粗相をしちゃダメだよ！！

（燐）大丈夫だって！心配すんな！！

… 燐君や、君の腹黒弟君に

俺みたいに優しくなれ！！　って言うといってくれるかい？

（燐）？別にいいぜ？

何かあったのか？？

イエ別二……

では、今回のゲストは燐君でしたあー！

出番が少なかったので多分次回も燐君になると思いまーす！（雪

男君は永遠にグッパイしたい…）

（燐）じゃあな！

また会おうぜ！！

H 2 3 . 1 0 . 2 1

青焰魔？（前書き）

注意！

主人公が空気化してる…

青焰魔？

「な…なにを……」

「楓、その目はさつきも行った通り青焰魔サタンの炎だ
身体からだの奥深くに眠っていた力が、燐の覚醒によって眠りが覚めた」
『…！』

青焰魔サタンの炎…青い炎…！

私が？ウソでしょ…

両親はちゃんと人間だし…何で…！？

頭の中が混乱している中、家についた

「とりあえず、この修道院を出ろ」

「『出る！？』」

あ、燐とハモった

…って、かばんが燐の顔面にぶつかってるし…

「おい！」

「これはく神隠しの鍵>

如何なるものも如何なる場所に隠すことができる」

そう言って、見せてきた鍵でタンスを開ける

中には刀が2つとそれぞれをしまう袋、あと魔方陣が書かれてい
る紙が4つ

「<降魔剣こうまけん>…、またの名をく倶利伽羅クリガラ>といい、古から伝わる
魔剣

そして＜鬼神丸＞こちらも古から伝わる魔剣…
この剣に^{クリカラ}燐、お前の炎を^{ちから}移植し鞘で封印している
抜けばお前は悪魔の身体に戻り、二度と人間としては生きられない
だろう」

これが、鬼神丸…私の、剣…
私のは燐とは違って何も封印されていないみたい…

「ぜったいに抜くな但し常に肌身離さずな、いざとなったら鍵で
隠せ

修道院から出たら^{これ}携帯ですぐ電話をかけろ、番号を一件登録して
いる

俺の友人の番号だ

今までと同じ生活とはいかねえだろうが…保護してくれるはずだ
楓とともに行け！！」

神父さん…^{とつ}

いきなり言われても分かんないよ…状況が理解できてないの私だ
け??

…とりあえず4枚の紙は渡されたバックの中に…っと

「…し、知らねえよ！！！」

「燐っ」

『ちよっ、燐！？』

「な…なんなんだよ急に…悪魔悪魔って…」

まさか本当に悪魔とかどーゆー冗談だよ！！

っ！か…雪男はどーなってるんだ！」

「燐と雪男は二卵双生児だ、雪男は未熟児で身体が弱く力を許容
できなかった

炎はお前だけが継いだんだ」

「…そ、そんな話…今更どうやって…どうして黙ってたよ！」

昔の燐だと「そんなの嘘に決まってるだろ？今日はエイプルフルルか??」

と、見事に英語を間違えて発言くるはず

（実際はエイプルフルフルです、燐みたいにならないよーに！）
まあ、非現実的だから仕方ないけどさー

「…お前を普通の＜人＞として育てたかった

お前が人である限り俺が育てる条件でな」

「…面接はどうすんだ！働けつつたくせに人間じゃなくなった
ら…」

どっか行けって言うのかよ！」

「そうじゃない！お前を守るために…！」

ヤバイ、ケンカがヒートアップしてきた…

てか、私の存在空気じゃない??

一番最後に話したのいつ？

結構前じゃない？

そんなこんなで結構激しい言い合いしてるし…

「二度と父親ぶんな…！」

『っ！燐!!?』

青焰魔？（後書き）

～あとがき～

えー、更新が遅れてしまつてごめんなさい！！

（楓）翔楼のバカっぽい小説読んでくれる人、いるのかねえ～

…ごもつともで

あ、今回のゲストは燐君と楓です！

（燐）うわー、きつたねえなあ…

失礼な！私の部屋だぞ！！

そんなに汚く………汚かったですね、スイマセン

（楓）まあいいけど…

私がほぼ空気ってどういう事？？

仕方ないじゃん！燐君と藤本神父のケンカに参加するわけにもい
かないし……

（燐）なんか、ごめんな？

（楓）大丈夫大丈夫！悪いのはみーんな翔楼コイツのせいだから

……いや、あの、その……ごめんなさーい！！！！！！

（燐）あー…楓が暴走したから、また次回会おうな！！
次回あたり雪男来るんじゃない？？

え、マジ？？

それではさようならー！！…いや、マジ、スンマセン！！

（楓）さようならー

H 2 3 . 1 0 . 2 6

青焰魔？

パン

部屋に乾いた音が響く

神父^{とう}さんが燐をぶったんだ…！

「言い争っている暇はない、おとなしく言う事を聞け…！」

「……………解った」

ふうーっ、親子喧嘩終了ー

私の空気化もおわり…！

「…！ぐむっ」

「神父^{とう}さん…？」

「！？…なんだよ」

いきなり神父^{とう}さんが膝をついたからびっくりしてじっと見る

身体が小刻みに震えていて、気がつく^{とう}と神父さんの身体から青い

炎が出てきた

「…クツハハハハハぬああんちゃってなああああ…？」

ギヤツハハハハハハハア~~~~！よオ息子！元氣！

可愛い我が子の為にこのオレサマ自ら迎えに来てやったぜ〜
ありがたく思えよ？」

『なっ！？？？？？』

サ、青焰^{サタン}魔…！」

「ん〜？何だあお前

ああ、あん時の…まさか成功してるとはなあゝ
丁度いい、お前も連れてくか」
『んなことされてたまるかってーの!!』

燐と神父さんとつに憑依した青焰魔サタンの間に鬼神丸を抜刀し、燐をかばう

「おいおい、やめとけよ？
手が震えてる、ぜ!!」

『っ…!!』

いきなり胸倉を掴まれて投げられる
イテッ…!

『んなの、関係ねえ！

私は…守るって決めたんだ!』

「うるさいねえちゃんだなあゝ
眠ってもらっぜ？」

『っ…!!?!!』

そう言って一瞬に目の前に来て首筋に手刀を落とされる
やば、い…もう、限界…!

…気がついたとき、そこにはもう青焰魔サタンなんかいないくて
ただ、血だらけの神父とつさんと刀にもたれかかって泣いている燐が
いた

『神父とつさん…？』

呼びかけてもびくもしない神父とつさん
分かっているけど、分かりたくなくてずっと神父とつさんと呼ぶ

『神父とつさん！！神父とつさん！神父とつ、さん…！』

止めようとしても全然泊ってくれない涙で神父とつさんの顔が見えな
くなる

それを手の甲でもう溢れないようにごしごしと擦る
燐に声をかけようかとも思ったけど、それどころではなかった

『……………』

神父とつさんの葬式じゆしきが終わって、お墓の前で傘をささずにいる私に燐
が近づいてくる

『ねえ、神父とつさんの最後、どうだった？』

「…すんげえかつこよかった、俺ら守って死んだんだ」

『…そっか』

会話が途切れると、燐が神父とつさんからもらった携帯で登録してあ
った番号に
電話する

それと同時に変な色の服を着た変な人と、神父とつさんが着ていたよ

うな服を着ている

人たちに囲まれる

「な…」

「はじめまして奥村燐君、桜林楓さん

私はメフィスト・フェレス、藤本神父の友人です

このたびはお悔やみ申し上げます」

青焰魔？（後書き）

ゝあとかきゝ

いや、めつきり寒くなってきましたね

（楓）知ってる？こつちの世界では春なんですけど、は・る！！

(燐) 寒いも何も、もう暖けえし

（雪男）一人だけ全然違いますよね〜

ビクッっっ!!!

ゆ、雪男サマ、イツカラソコニ…

（雪男）さっきからですけど、何か？

ごめんなさー！ー！！！！

（雪男）僕もそこまで性格悪くないですよ……
次回で出てくるなら許します

結局次回出てこなかったら…？

（雪男）さて、どうなるかはお楽しみです

…次回に絶対雪男君を出したいと思いまーす！

（メフィスト）私の出番を少なくしないでくださいよ？

奥村先生と違って、私はメインキャラクターではありませんから

（燐）先生？？

（雪男）あー！！

翔楼さんが寒すぎて芋虫になってますよー！！

んあ？

寒いー！！！！

（燐）だらしねえな

こんなんだから太…

何？？なんか言った？

（燐）怖ええ

（楓）そんなストレートに言うからだって…

（雪男）では、芋虫翔楼はおいといて
また次回お会いしましょう！

（燐）またな

（楓）やっと空気が終わる！！

（メフィスト）私の出番が……！

キャラ濃いなあ…

では、また！！

H
23・10・30

番外編 〽ハロウィン〽 (前書き)

京都弁わかんねえー！！

というわけで、関西＆四国出身の翔楼の変な関西弁です
注意してください！！

番外編　くハロウィンく

とある京都の幼稚園

ここでは年に一度のイベントの為の工作を行っていた

そう、今日はバレ…ゴホツゴホツ…えー、ハロウィンDEATH
…じゃなくて、です！

「さーて、皆何が出来たのかなあ…?!か、楓ちゃん…な、何
書いたの?？」

『えーつとねえ…おうちのちかくにいるいぬ…！

このまえじゅうにいときんにいが

このいぬにちゅういしろよ！かまれるから…！…っていったか
らお化けにしたの…！』

「そ、そっか……」

いつもニコニコしているはずの保母さんの顔をひきつらせたそ
の絵は…

犬ではなく………ピー…だった

結構気に入っているのか、いつも仲良くしている3人の方に行っ
て絵を見せる

『みてみて！ワンちゃんかいたの…!!』

「かえでちゃんえがうまいねえ、さすがぼくのしょうらいのお
よめさん…!!」

「なにがしょうらいのおよめさんや！、かえではみんなのもんや
…!!」

「そうですよ」

廉造の発言に反対する坊と子猫丸
そのやり取りを聞いていない楓…

『で、みんなはなにかいたの？』

「ぼくはかぼちゃのおぼけ！！かぼちゃきらいなんよ…きょう
のきゅうしょく、かぼちゃやる？

いややわあ…」

「すききらいせんとたべんとおおきいなれんっておかんがいつて
たで！！」

胸を張って言う坊にウゲっという顔をする廉造

「でもぼくもすこしきらいや…」

「おれやつてそうや！！でもたべんといえつげへんもん！

だからがんばる！！」

『ぼんすこい！！』

わたしはとまとがきらいだなあ…』

「おいしいで？とまと」

『グジュってなるのがいやなんだ…』

「そうか？」

とまあ、お面の話からなぜか好き嫌いの話で盛り上がる4人
給食もきちんとして食べて、もう家に帰る時間…

「楓ちゃん、廉造坊、子猫丸」

「なんで私が^{あて}コイツと…」

『「「「はい！！」」」』

今日のお迎えは廉造の兄の柔造と、その幼なじみ…？の蝮
4人は午前中書いたお面をかぶって2人に飛びかかる

「おわっ！！?」

「なっ???!」

『せーの「」とりつくおあとりと!?!」「」』

「今日はハロウィンか」

よし、ちよつとまつとれ………お、あつたあつた！
ほれ」

柔造の手には飴玉が4つ、包装紙の色からしていちごミルクだ

『わーい！いちごミルク!!!』

「かえではいちごミルクすきやなあ」

呆れたように言う坊にちよつと膨れる楓

「じゃあ、私^{あて}からはこれやな」

蝮の手にはチョコレート

「ありがとおな!!!」

「ありがとうございます!」

『ん、おいしい』

「じゅつにいー、ぐみないん?」

お礼を言う坊と子猫丸にもう食べている楓、廉造はお菓子の交換を要求…

『れんぞーずるい!!』

おんなじおかしくないため!!』

「わかったわー、んじゃあいつしよにたべよ?

かえでちゃんとたべたほうがおいしい!!」

『わたしも』

みんなでたべるとおいしいね』

廉造のアプローチに気づかずにスルーする楓の将来を心配するその他のメンバーであった

(かえではきいぬけすぎなんや!)

(でも坊、そこが楓ちゃんのかわええとこや)

(変態申はだまつとき!)

(なんやと?!)

(わーっ、ふたりともおちついて…!!)

番外編　くハロウィンく（後書き）

くあとがきく

いやー、グダグダですね

ごめんなさい！！

（楓）えーつとねく

…どうせお前なんだから仕方ないだろby楓（15歳）…だつてく
すごいね、おんなじ名前だく

（坊）もしかしたらどうせいどうめいなんとちゃっく？

（廉造）そんなひといはるん？

（子猫丸）おるひとはおるんやとおもっけど…
みたことないなあ

はいはいおチビたちおしゃべりはその辺にして、お別れを言いな
さい！

（坊）ん？なんやこれ

…こんなきかくするんやったらさっさとほんぺんかけ！！
おれらがまだでてへんやろ！by勝●

… がんばりまーす
ではさようなら！！

（廉造）ほななゝ

（子猫丸）またおあいしましゅー！

（坊）またあおな！！

H 2 3 . 1 0 . 3 1

青焰魔？

「お、お前ら……エクソシスト 祓魔師か…？」
「せいじゅうしきしだん 正十字騎士團」と申します」

燐の言葉に答えるメ、メフィスト…？さん
言いにくい…！

『神父しとさんは私たちを保護してくれるって言ってたけど…？』
「私はこれでも名誉騎士めいよきし…責任ある立場でしてね
公私混同はしない主義です」

その、責任ある人がおかしな服着てないと思うんですけど…
うわー…ブーツ地味にピンクじゃん、靴下とか、スカーフもただど
え？ピンク好きなんですか？そうなんですか？？
確かに、最近ピンクを着る男子は可愛いとか言われてますけど…
なんか、目がちかちかする気がする…

「燐君はサタンの息子、楓さんはサタンの炎ちからを持っています
人類の脅威となる前に殺さなければならぬ」
『なっ…！』

殺されるって…私たちは全然、悪いことしてないのに…！
いや、全然ではないか…ケンカしたし…あ、いたずらもしたなー
……てか、そんなのでは殺されないか！

「あなた方に残されている選択肢は二つ
＜大人しく我々に殺される＞か＜我々を殺して逃げる＞か…

（つか、テメーの恰好の方がおかしいから！）
「ハハハ、正気とは思えん！」

大笑いを終えてヒ―ヒ―言ってるメフィストさん
……あなたの服を見てくださーい！一番おかしいのはその服ですよー！！

『正気ですけど？』

「クククツ…サタンの息子と力を持ついわば娘が^{エクソシスト}被魔師…！！
おもしろい、いいでしょう」

「ちょ、フェレス卿…！」

自分たちにとってはうれしんだけど、後ろの人たちがかわいそう…
う…

この人、自我が強そうだし…なんか扱いがめんどくさそう（酷い）

『え…マジでいいの？！』

「但し、貴方が選んだ道は茨の道
それでも進むとおっしゃるならば」

「俺らはもう人間でも、悪魔でもない
なら、^{エクソシスト}被魔師になってやる…！…そうだろ？楓」
『当たり前じゃん…！』

青焰魔？（後書き）

～あとがき～

こっちの更新が遅れてしまつて本当にごめんなさい！！！！

（楓）ほんとだよね～、暇で仕方なかったから翔楼を呼びだして脅すところだったよ～

黒っ！楓っち黒い！！

（燐）楓つてたまに黒くなるよなー
俺がケンカしてる時に通りかかったら相手も俺も一緒に正座させたことあつたし…

さ、最強じゃん…！

（楓）ん？何か言つた？（黒微笑）

イエ、ベシニ…

（燐）じ、じゃあまた次回な！！

（楓）さようなら～

$$\begin{array}{c} \text{H} \\ 2 \\ 3 \\ \cdot \\ 1 \\ 1 \\ \cdot \\ 1 \\ 2 \end{array}$$

さ、さようなら！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4423x/>

青の祓魔師 ~ 青き焰 ~

2011年11月17日17時05分発行